

# 小論文

注意

1. 問題は全部で3ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

以下の文章は、財政再建・行政改革を課題とし、総選挙の最中に急死した大平正芳首相の国家構想について述べたものである。文章を読み、設問に答えなさい。

大平総理の「豊かな人間性、参加と連帯に生きるふるさとを取り戻したい」という心象を図柄にしたのが田園都市国家構想であろう。(略)大平総理の田園都市づくりの構想を『田園都市国家の構想』にまとめあげたのが、(略)「大平総理の政策研究会」九つの研究グループの一つ、「田園都市構想研究グループ」(議長＝梅棹忠夫国立民族学博物館長)であった。詳細は『田園都市国家の構想』を参照してもらうこととして、ここでは「国家の構想」に焦点を合わせてみてみよう。

まず、「田園都市国家構想は、『文化の時代』の国づくりをめざすものである。今日、物質的生活の豊かさの中で、国民は、量から質へ、物質的なものから精神的・文化的価値の高いものへと、個性的で円熟した生活の質を求めはじめ、多様な文化活動に対する欲求が増大しつつある」として、次いで「『文化の時代』は、地域における文化活動が必然的に盛んになる時代であり、『文化の時代』は、この意味で、同時に『地方の時代』とならざるをえない」と、文化の時代と地方の時代をつなげる。

日本の国家システムの特質からする地方の時代の到来を次のように掘り下げる。

#### 「六、日本の国家システムの特徴

- (1) 『独自性』と『多様性』を尊重し、『活力ある部分システム』をもつことを特色とする日本文化の構造を反映して、日本の国家システムも、長い間、基本的に『分散型』の特色を強く有しながら、中央との調和を図ってきた。なお、国家システムを論ずる場合に、日本では、その伝統的な文化特質の中で、『分権と集権』、『中央と地方』、『都市と農村』という、二極対立の発想をとらず、本来その調和を大切にしていることに、留意しなければならない。
- (2) 日本においてやや過度に中央集権化に偏った制度がとられたのは、隋唐文化を大いに摂取した『律令の時代』と欧米文化を大いに摂取した明治以降の『近代化の時代』だけであった。
- (3) 明治維新後の中央集権体制は、日本の歴史のなかで、むしろ異例の事態であった。政治権力の過度の集中の結果、生産も、流通も、管理も、教育も、文化も、中央に集中し過ぎる結果となり、大都市の膨張と過密化を招き、一方では地方の過疎化をひきおこすこととなった。

## 七、地方の時代の到来

- (1) 二一世紀の日本の国家システムの方向は、明治以降の過度集中を是正し、バランスのとれた『分散=集中』システム、『多極分散型』システムへの移行であろう。それが『地方の時代』の到来である。
- (2) 地域社会の充実を図る場合に、基本的に重要なことは、あくまでも地域の『自主性』を尊重することである。『地方への権限移譲』とか『地方への財源配分』ということは『中央から地方に権限を譲り渡す』という中央集権の発想に根ざしていることに注意しなければならない。

中央は、過度に集中している行政権限や補助金を徹底して削除するとともに、地域は、各地域の要請に対応した行政を自らの判断によって選択し、そのために必要な財源を自ら確保することを基本としなければならない。

つまり、二一世紀の日本の国家システムの方向は「多極分散型」システムへの移行であり、それが「地方の時代」の到来であり、そのためには基本的に重要なのが地域の「自主性」の尊重だということ。そして「田園都市」と呼ばれるこの新しい地域社会は「国が進めている諸々の圏域行政の中から、それぞれの地域の自主的選択により、三〇年、五〇年、一〇〇年という年月の中で、自然に形成されてくるであろう新しい地域社会を意味している」と他方で述べている。「定住圏」「地方生活圏」「広域市町村圏」「文化活動圏」のような国が進めている圏域行政の中から、この「国家構想」が期待する「田園都市」と呼ぶ新しい地域社会の多極重層的ネットワークが自然に形成されていくという。しかし現に進められている行政レベルの圏域行政にゆだね、地域の自主的選択によって自然に形成されてくるだろうとしたのは不幸な妥協だったのかもしれない。未だに「田園都市国家」へ転じる潮目は見えていない。

しかし、これは、この「国家構想」にとっては枝葉末節の政策技術論かもしれない。ここで基本的に問うべきは、「田園都市」国家構想が、ちょうど「GNP、経済成長」が、政治言語としてそれまでの「国体」の教義にとってかわったように「GNP、経済成長」にとりかわり得たかであろう。GNPが、国体というよりどころを失い、敗戦後の貧しさの中にある国民にとって、国際的に日本が先進国に追いついていく道標となり、GNP、経済成長によって自らの生活がよりよくなっていくことを実感でき、GNPの膨らんでいくことを期待しつつ自らの生活を設計していくという、企業、労働組合と

いう組織のみでなく、国民一人ひとりの内面を突き動かす、信仰に近い役割を果たしたような、そんな衝撃を「田園都市」国家が与えたであろうか。残念ながら、一番これを信仰するはずの「地方」にとってすら、そのエネルギーを突き動かすイデオロギーにはならず、予算要求の手掛かりにとどまった。

しかし、この田園都市国家構想の描く絵は、日本人にとって常に回帰の衝動に駆られる桃源郷であり、四季豊かで美しい日本列島に生まれた一人ひとりにとっての原風景である。

(星野進保『政治としての経済計画』日本経済評論社)

注：一部表記を省略、修正している。

問 1 下線部分について、外国の文化を大いに摂取した時代に日本が中央集権的な体制となった理由につき、考えられる事柄を 100 字以内で論述しなさい。

問 2 「田園都市国家構想」は、首相の死によって実現しなかった。しかしここで問われた「文化の時代」、「地方の時代」は、今でも課題として生きつづけている。当時の時代背景との違いを考慮したうえで、現代におけるその可能性について 700 字以内で論述しなさい(「国際化」、「人口減少」、「低成長」、「財政破綻」の 4 つの語句すべてを必ず記述に含めること。また 4 つの語句を最初に使った箇所には下線を付すこと)。







